

コア・カリキュラムに対応する教育総論の授業設計の在り方

～教材並びに指導過程・学習形態の観点から～

An Investigation of Instructional Design for Principles of Education Based on the Teacher Training Core Curriculum — In Terms of Teaching Materials, Teaching Process, and Learning Style —

浅田 豊

Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師, 青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授

Aomori Chuo Junior College, Aomori University of Health and Welfare

Key words : コア・カリキュラム 授業設計 学習形態

1) はじめに

真に実践力のある、即ち専門的技術性の高い教師とはどのような存在か。地域社会や各家庭、教職員同士、対象となる子ども達からなど、どのような観点から省察した場合でも、一人ひとりの児童生徒の個性という名の輝きが一層増すように適切に適時支援することができ、その自己実現を主体的かつ段階的に達成できる力をすべての子どもが身に付けることができるよう、子どもたちの発達課題やニーズを踏まえ、学力、生活、人間性の各側面から集団・個別の両面から援助することができる資質をさすものと考えられる。その資質には当然として、責任感や誠実性、コミュニケーション能力なども含まれる。

つまり、教員免許状を付与するための養成課程においては、そういった大変今日的かつ普遍的な社会からの期待へ十分に応えるための水準を保障しなければならない。一方で、要領や規準という性質のものは組織や活動、精神を過度に硬直化・画一化させることなく、各教育機関、担当教員のビジョンや意欲、業績に基づく独自性、適切な範囲での多様性が損なわれないように留意した上で発出されることが望ましい。以上の調和のもと、よく練られた高度に体系化されたコア・カリキュラムの提示を受けたとらえている。今後開始・運用されるコア・カリキュラムに対し、十分に妥当な教育計画を立案し、その本質・政策・課題を明確化することを本稿の目的とする。

2) 教材作成の観点

コア・カリキュラムの目標を効果的に達成するために、まず教材づくりの本質的側面に際しては、

知識面の習得・向上を最適なものとするために、P D C Aサイクルが多角的に検討されなければならない。教育総論の教育内容には、高度かつ複雑な概念が含まれることから、アクション・リサーチの営為を大学教員として常に意識し、実際の受講学生個々の、あるいは小集団の中の知識・理解面での課題を速やかに発見し、その短期的・中長期的な解決策を学生の観察を通じて明確化し、解決に向けた仮説化、実践、検証を順次実行し、さらにその後の学生のノートや態度を観察し、その妥当性を検討する。つまりシラバスや指導案の中で立てた教材・指導過程・学習形態に修正が必要な時には、定められたG I O、S B Oと申請の範囲内で発展的・補足的に、内容の追加を躊躇せずに行うことが重要であり、そのことに関連し、シラバス完成時の付随的な教材リストを表1に示す。

3) 指導過程における工夫

指導過程(表2)における政策的側面に関しては、90分間という1コマの中の過程の効果を最大とすることを目指す必要がある。それは当然として十分な予習復習の前提・連結と不可分の関係にある。とくにアクティブ・ラーニング等の観点から、受身的に聞き流すことや単に試験に備えて記憶を再現する作業にとどまらず、膨大な知識をもとにそれらを活用して自分なりに咀嚼した思考・表現を自立的に展開できることが求められる。即ち特に思考・判断・表現の力の育成においては、学生の現在の教育機関及びこれまでの学校内外での個別あるいは共通の体験の振り返りと、現在の学習内容とを統合し何らかの見解を生み出す力を高めるための援助的指導が過程上求められる。また思考や表現の講義中の活動と知識の獲得・定着との間に、無理を生じさせないような配慮を経て、講義中に適度に、記述、議論、発表、展示作品制作、説明、弁論等のパフォーマンスの場を与えることが望まれる。

4) 学習形態検討の視点

学習形態(表3)を事前に研究するにあたっては、学びに向かう力の育成を多角的に分析する必要がある。意欲や問題解決能力、協力の力を高めるためには、学習シートに記載した意見内容をペアで交換し、感想や批評をその意味を自覚し意義を有しながら述べ合う等の、短時間のプロセスを含めることが一つの方法として有効である。また今日一般的に、90分という時間を長く感じる学生もいることから、集中力の保持支援も教員の役割の一つであるため、1コマの中に、読む・書く・聞く・話す場面をその展開過程に合わせ有効に配置することで、関心・態度を高めていくことも重要である。無論その情意の側面は知識・思考という認知やその深まり、創意などと密接に連結されていることが前提である。またグループ学習の進度に差が出ることもあることから、展開が早いグループには各項目を深く掘り下げる語り掛け、および次なる課題提示の準備、苦戦するグループには教え込む形の指導ではなく考える題材やきっかけ、気づきをもたらす基になるアイデアをカードにして静かに手渡すなどし、援助することが望まれる。

5) おわりに

実施上の課題としては、何よりも、レディネスへの十分な対応が含まれる。この点の計画と事前研究が不十分であると、講義並びに学習に大きな困難を伴うからである。対応即ち学習活動の受信・咀

嚼、解読、発信のすべての過程での支援、資料やホワイトボードの視覚的情報と学習者同士の口頭での情報のやり取りを常に主体的に統合できるような教員側の観察とノート点検などの形成的評価、等の支援が課題である。今日一般的に、中には発言や発表、考えの記述、議論をそれぞれ苦手とする学生もいるが、そのような学生も適切な支援により大きく伸びていくことから、学生の発話や表現、その土台となる思考・判断に関し無理なく、学生自身ができる喜びや楽しさを実感しながら学習に取り組むことができるように、配慮をすることが課題である。コア・カリキュラムのもとで、今後も引き続き授業運営に関し理論的・実証的に研究を続けていきたいと考える。

6) 文献

- ① 文部科学省教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コアカリキュラム』2017年11月。
- ② 文部科学省中等教育審議会『今後の教員養成・免許制度の在り方について』2006年7月。

表1 教育総論の教材の例

1回	興味関心を高める概念図
2回	テーマに関する資料を学習カード化させ思考を促進する。
3回	テーマに関し、社会における位置づけが分かるようにイラスト並びに史料群を準備する。
4回	テーマを多角的に理解するための書き込み式ワークシート
5回	テーマに関するディベート用題材
6回	テーマに関する展示物
7回	問題解決を促進させるワークシート
8回	分担しつつ討議が遂行できるように組まれた協議用題材
9回	成員間の人間関係深化・スキル向上につながる協同学習用題材
10回	連結型のグループ協議に適した題材
11回	お互いに評価を書き入れる様式のワークシート
12回	役割分担と調べ学習の手順、サンプルを記した資料
13回	シナリオ事例
14回	相当量の資料集
15回	ロールプレイ用の事例

表2 教育総論の指導過程の例

主題（概要）	
<ul style="list-style-type: none"> ・教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想 ・教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む） 	
1回	教育学の諸概念、教育の本質、教育の目的・目標に関し、学生のレディネスに即した系統的で分かりやすい説明を心がけ、中盤に質疑応答を含め、終末へつなげる。
2回	学校・教師・子ども・家庭の視点から見た教育を成立させる要素に関し、学生に自分の理解についてメタ認知的に振り返りをさせながら、十分に導入時間を確保し、丁寧に板書しつつ進める。
3回	家庭教育・社会教育の視点から見た教育の歴史に関し、互いのグループ協議の成果の発表・共有による学びを自覚させながら、理解の深化を支援する。
4回	近代教育制度の成立・展開に関し、解説あるいは他者の意見に対する各自の意見・質問をワークシートに記載させながら、テーマへの理解を深めさせ、形成的に学習状況を把握する。
5回	現代社会の教育課題に関し、双方向の対話・質疑応答を通じて、思考・判断の力を高めていく。
6回	家庭・子どもについての教育思想に関し、基礎・基本となる学問的知識が定着するように、学生の反応に留意しながら個別支援を行う。
7回	学校・学習についての教育思想に関し、発問の技術を高めイメージがわくように説明し、問題解決の自立的展開へつなげる。
8回	西洋・日本の教育思想に関し、予め中間段階でミニアンケートを実施し、授業の改善をしつつ、規準・基準を踏まえた、能動的な活動を引き出す助言を進める。
9回	学校をめぐる状況の変化に関し、抽象的な概念を分かりやすく解説するとともに、理解の面で集団の中で差ができた場合には、補足の時間を展開部分に確保し、支援する。
10回	子どもの生活の変化と指導上の課題に関し、発問方法を一層工夫し、発言が難しい学生にも選択やヒントを与えながら、表現させることで思考を深めさせる。
11回	近年の教育政策に関し、解説を補うためにカラーや図表を用いた板書を行い、さらには意図的に未完成の状態を示した図表に対し考えが湧き出るように支援した後に、ピア評価へつなげる。
12回	諸外国の教育改革に関し、ICTなど豊かな表現のもとでの説明を工夫し、ポスター発表の後に、論点をまとめ終末とする。
13回	学校と地域の連携・協働に関し、シナリオをもとに議論を深めさせる。
14回	開かれた学校に関し、事前の十分な量の学習を支援し、質疑応答を専門的な内容に関し実施し、個別的に支援を行う。
15回	学校安全に対する教育に関し、役割演技の感想の共有の後に、解説と質疑応答につなげ、授業そのものの総括へと進む。

表3 教育総論の学習形態の例

1回	コの字型の配置により理解を深める。
2回	ペアによる振り返り学習
3回	班ごとのグループ協議により学習スキル・ソーシャルスキルも同時に習得する。
4回	ラーニングコモンズでの個別指導を適宜含める。
5回	ディベート方式
6回	発見学習
7回	問題解決型学習
8回	ジグソー方式
9回	協同学習
10回	ワールドカフェ方式
11回	ピア評価方式
12回	ポスターセッション
13回	PBL
14回	反転授業
15回	ロールプレイ方式

